

平川彰著

仏典講座

『八宗綱要』

石上善應

一
凝然の『八宗綱要』は、かつては古典的仏教概論として、もしくは仏教入門の書としての役目を果たしてきたものであるけれども、すでに現在では八宗の意味するものが、十分に現代に適応しないことと、漢文体のなじみにくさが、いつのまにか古典的名著の名を冠することによって、一部のもののみの愛好する傾向が強くなっていったことも事実である。しかし、いかに古典的とはいえ、古典性が逆に本書の復活を試みる結果となっているのも、その理由なしとはいえない。確かにかつての時代のように必読

し、熟読されることは少なくなったものの、一方において根強い人気を持ちえている『八宗綱要』には、現代に即応させるための補足的解説がなされて、はじめて現今に適応できる入門書の一つとして用いられるものであると言つてよいであろう。近世、仏教の学林においては初心の出家修行僧の学習の基本書であった。また、明治・大正・昭和の初頭においても広く読まれたが、ここ二、三十年ほどはかなり相違してきている。その背景にはすでに以上のように指摘したことで、研究の多様性が、教理の骨組を記した本書を遠ざけている一因としたようにも思われる。ここで当然、そのギャップを埋めるべき解説

が望まれることとなる。その折しも、斯界の第一人者である平川彰博士が本書に詳細な解説を施して公刊されたことは、きわめて時宜をえたばかりではなく、博士の教理史に対する理解の深さが、この上ない『八宗綱要』の名解説となったことは、むしろ慶賀すべきことであろう。博士の難解な術語に対する平易なる解説の仕方は、すでに定評のあるものであるが、恐らく今後は本書を頼らずして『八宗綱要』を見ることはできないと思われるほどの要領のよい的確な概説書としてまとめられているのである。

凝然が、二十九歳のときの著作であるという『八宗綱要』は、その学識の確かさ、仏教に対する情熱の筆力と冷静な記述とに驚くほかはない。また、当時、受容された漢訳経論の総合からは、当然の帰結でもあり、この形態は教理学の集約の成果を示した模範の書であることも間違いない。それにしても、『八宗綱要』の解説書として、本書を軽く見ることは見当違いもよいところである。それほど多くの問題をわれわれに投げかけている。

平川博士はまず、『八宗綱要』の書名そのものを問題視する。その上で、本書において、何を底本とするか、

従来刊行されてきた諸版を検討し、龍谷大学編『講本八宗綱要鈔』（昭和四十二年本）を採用し、その他の刊本を参照するという手続きを明らかにしている。また、既刊の解説書についても網羅的にとりあげて、歴史的解説も加えている。続いて凝然の経歴、信仰、著作を紹介し、その中で、凝然が戒律厳しい実践家であり、華嚴の宗旨を奉じ、しかも晩年に浄土信仰を持っていたことを明らかにしている。もちろん、二十九歳の著作であるから、晩年のことまでは予測する必要はないが、この信仰と八宗の構成とになんらかの関連があることを認めておられるのである。この伏線は確かに重要な視点を与えている。

『八宗綱要』が問答体の形式をとり、最初に教理の大綱と、インド・中国・日本と仏教が興起してから発展した経過を概説する総論の部分と、俱舎・成実・律・法相・三論・天台・華嚴・真言の八宗の歴史と教理を述べる各論の部分と、最後に禅と浄土の二宗の付説の部分からなるもので、中心がこの各論に当る八宗の解説にあることは言うを俟たないところである。八宗の中では、律宗の解説が最多で、以下、法相・天台・華嚴・俱舎・三論となり、成実宗がもっとも少いのは教理が俱舎宗と重複

現代の宗観念が「信仰の帰趣としての心の拠り所を意味している」のに対し、奈良時代の六宗をさす「宗は、学派というほどの意味であった」と指摘する。これはわれわれにとって常識としていえるところではあるが、凝然が『三国仏法伝通縁起』の中で、中国より十三宗の弘伝があったことを記し、『八宗綱要』も同様の立場であると、それを現代人が現代感覚で宗観念をとらえていることに適合させて解釈している面も一部にまだ残っているだけに、博士の解説は必要な記述である。凝然の著作が後世にいかほど偉大な影響を与えたかよく判るのである。湯用彤の『漢魏両晋南北朝仏教史』の成実・三論を説く最初の部分で、「惟唐代之争、已立宗派。而六朝之世、仏学只有師法、尚未成立教派。日本僧人所伝、謂南北朝有成実宗、三論宗、等等、実則不合史実。依史実言之、南北朝僅有経師、」（七一八頁）とあることから、日本の伝承に關しての非を認めていることになる。（これに關連するものとしては、平井俊榮『中国般若思想史研究』二八頁以下参照）したがって、八宗の宗概念の確認は、従来誤り伝えてきた影響が大きいだけに、重要な意義をもつものである。しかも、その源流が凝然に帰せられてきた

し、独自の教理が少いことによる。また、南都六宗の伝統を重んじ、成実宗は日本で最初から一宗としての力がなかったのに一宗としたのは、中国にならったからであろうとする。さらに、凝然が二十二歳のとき、すでに九品寺長西から浄土の教理を聞いており、浄土信仰や禅研究もしていたが、比叡山から反対されていた当時の二宗を付説にしたのも当然であったことになる。これらの諸点を明示して、博士は八宗の順序にふれる。律宗を小乗と大乘との中間に置き、天台の次に華嚴を置くところに凝然の特色を見出しておられる。その規準が価値的順序を示すものではなく、凝然の組織仏教学の立場に立った配列として評価している。このような周到なる解題を示して本文解説へと進む点、一般の解説書や綱要書とは少しく相違している美事な新しい解説を組立てていることになる。恐らく博士は大学の講義で整理されたことがあるものをもとに、簡にして要をえた導入部を作成したとしか思われないほどに、文体構成に過不足なく水際立ったものがある。

二

総論の等一章「教理の綱要」で説く經典論では、伝統的経論の構成と、現在の分類整理とを対比して敷衍する。第二章「歴史」の第一節「概説」では、釈尊入滅後の教団のリーダーの系譜が、迦葉・阿難・末田・商那・優婆塞多の五師とするのに対し、北伝の部派傳承の相違と、相承の問題点、南伝の相承などを提示して、各部派の系譜の相違を示している。第二節でも小乗二十部の分派を同じく提示し、大乘の興起から分派までを概観しているが、この点、凝然は有名な論師を取りあげてしめくくるが、さらに五百年もインドで仏教が続いていることを博士は付け加え、その後も仏教徒が残存したことを紹介している。このような形式で中国・日本へと概説する。

第三章「八宗概説」は簡単な叙述であるけれども、看過するわけには行かない部分である。凝然はごく一般常識として公認された八宗を挙げ、俱舍・成実・律の三宗は小乗であるが、それ以外は大乘であり、すべて教理を知らないから、ただ教理の名目のみ並べて、その一面を述べようというのである。これに対し、博士は、「八宗の『宗』は、現代の日本佛教で使っている『宗』の意味とはかなり違う」と、まず宗の概念のずれを提示する。

ことも事実といつてよい。しかるに、博士は中国に見える「宗」の種々の用例をもとに、現代の宗派観念とも相違していることを記し、さらに、『八宗綱要』の「八宗」は日本仏教で独自に成立したものと見るべきことを明かにしている。淡々としたこの記述は、凝然の考えている宗観念を、後世、傳承する側の手によって勝手に誤り解釈されてきたことを暗示しているようにも読みとれる、きわめて好意的解説として受けとられるのである。仮りに凝然にこのような観念があったとしても、当時として問題意識にはならないものであり、むしろ、それを補うことが現代人の適応すべき責任であると考えておられるのかも知れない。この叙述の方法は、特別の凝然批判もない記述だけに、平川博士の執筆態度とその背景を逆に推測する以外に方法はない。この好意的ともいえる凝然への敬愛の記述は、最後の跋文に現われている。弱年にして名著を著わした凝然が現代人よりも仏教理解のはるかに深いものがあり、「この点、佛教を学ぶ者の奮起が必要である」と結ぶ点に濃厚に現われている。

「各論」の最初は、俱舎宗である。まず、『俱舎論』を基とする論宗の理由を明らかにする。アビダルマ(対法)が法を見る智慧であるとする、法を見ることのできない凡夫には無縁の存在となる。論蔵は仏弟子が説いたものでも、仏陀の説法に基づいている限り、アビダルマも仏説であり、「そこに佛智が含まれているから、凡夫がそれを学んでも『アビダルマ』と呼ぶうる」し、「その法の研究によって、凡夫の智慧が悟りの智慧に転じうる」と見ることを力説する。このことは『俱舎論』に説かれているが、凝然が説明の中で省略している点を補足したことになる。ここでも博士は法の伝承の一貫性を問題視しておられる。恐らく凝然は、当時としては、当然のこととして問題にしなかった点であったかも知れない。しかし、博士の論述は不可欠の部分として生きてくる。このあとに『俱舎論』の成立と伝播について記されることになる。さらに、『俱舎論』が有部の所屬かどうかを問題にする。このことは、古来より有部か經部かという二説があったことを裏づけていることになるが、凝然は有部

の所屬と見ており、この説が凝然以降、比較的強い影響力を持ってきた。しかし、最近の研究成果では、『俱舎論』の作者、世親は經量部であるという説が有力であることを紹介し、一義的に断定できない面のあることを説いている。つぎの『俱舎論』の三世実有説を凝然の説明にしたがって記述するものの、世親が三世実有説を紹介した後で、經部の立場から破斥していることにもふれ、凝然の解釈とのずれを指摘している。

以下、『俱舎論』の構成と、五位七十五法、三乗の因果説、我空法有説など難解な教理を簡略に説明しているが、凝然の記述は広く仏教を学ぶ僧たちの手本とされるほどに、記憶に便なるものである。それを博士は長年、『俱舎論』を講義されてきた要旨をまとめ、実に面目躍如たる解説となっており、さらに、「附」として『俱舎論』の研究法と参考書を紹介し、解説しておられるが、いかに通り一ぺんの解説でないか、これだけでも知ることができよう。むしろ、略述した中に、平川博士の長い間の研究の結晶を見なければならぬことを痛感する。『成実論』とその教義の研究は、わが国ではきわめて少い。しかし、中国の梁代にはもともと隆盛であった成実

宗が、その後、隋・唐に輩出した学僧たちから、大乘か、小乗に属するか、大いに議論の対象となる理由があった。一つには『成実論』自体の思想性、二つには、当時、中国で盛んであった成実宗を打倒し、自己の宗義を闡明にする必要性があったことからである。この点より、成実宗の教義体系を説明する仕方は、研究書が少いだけに、博士の論述は、『成実論』とその教義の解題の役目を果たしている。そのことは、宇井伯寿博士の国訳一切経の解題を一步進めたことになると理解してよい内容となっていることである。

第三章「律宗」は、凝然のもっとも意を注いだ部分であるが、平川博士もまた同様に律の研究においては第一人者であるから、その筆力も一段と熱を帯びている。律の伝承、中国の相承、四分律の弘伝、鑒眞の来朝、道宣と南山律、戒の分類と、凝然ならではのものであり、また出家者としてあるべき姿を論ぜんがために詳述したといってもよい。それに対し平川博士は忠実に説明していく。また、そのためには、パーリ律やチベット文の律蔵にまでふれて論述する。凝然が律の註釈を「五論」にまとめられているが、そのほかに義浄訳出の根本説一切有部律

があるのに、どうして中国・日本で影響を与えるに至らなかったかまでを追及している。

鑒眞の来朝の意義は正統な受戒ができるためであるが、それは四分律宗の伝来ということになった。その鑒眞はまた天台の学僧であり、道岸から菩薩戒を受け、律は弘景から四分律宗を受けた。この弘景は道宣の弟子であるから、その点から南山律宗を受け継いでいることになる。鑒眞はその他の律疏をも学んでいるという姿まで浮彫りにしている。凝然が『善見論』を『四分律』の註釈と見ている誤りも指摘している。また、「律宗が特に主張することは、大乘の宗派でも、小乗と同じ戒律を守らねばならないということである」わけで、中国ではあらゆる宗派が「すべて『四分律』によって戒を受けて修行する」ことを明らかにしている。この後で、戒体論に及び、凝然の理解のありようを受けとめ、結局、「佛教を修行する行者の心の最後のおちつくところは、この小乗の『四分律』を、大乘菩薩の立場で実行する南山律宗の教理である」として結んでいる。

第四章「法相宗」は凝然が律宗に次いで二番目に長い解説を施しているところであるが、平川博士はむしろ、

ここに一番スペースを費している。確かに五位百法、唯識観、三性三無性論など、その一一を論ずるには、多くの紙数を必要とするであろう。博士はそれなりに平易に解説する努力をしておられる点に関して、その労を多としなければなるまい。この中で、五姓各別説は関心を呼ぶところである。博士は「人間の本性は一つであり、すべての人が成佛の因子である佛性を持っている」とする一乗仏教を理想主義の立場とするのに対し、法相宗は、「経論主義の立場」に立つ違いであるとも見ることができるところとする。大半の大乗仏教が理想主義的傾向を有するのに対し、法相宗は博士の言われる経験主義か、あるいは現実主義的傾向に立つというか、この両者の見解が古来より激突してきたことを興味深く語ることとなる。最後に、俱舎と唯識との研究方法について述べているが、この記述は初心者にとって、まことに親切な解説である。本書はここまでを上巻として扱っている。

第五章「三論宗」に至ると、凝然の本文を受けて解説するの、前述以上に、ごく自然に増幅して筆をすすめる。三論宗の宗名についてのみの本文に対して、博士はインドの中観派、プラーサンギカ派やスヴァータントリ

カ派までの歴史に立ち至り、破邪顕正の起る理由を明示する。この導入が後文の凝然の本文に繋がる役目となるように説き至るのも妙というべきである。また、三論宗の教義の中心に『三論玄義』が用いられており、その典拠より、解釈にまで眼を向けるのも当然の論法とする。三論宗の歴史の記述に至って、凝然が何に依って記したか。また、現在の研究の進展から適切とはいえないことを指摘する。凝然に関しては史実の是非に問題があることを言わざるをえなかったこととなる。それにしても、中国の「相承が明らかでないから、不備な資料によって、凝然がここまで論じているのは、多としなければならぬ」と弁じている。

第六章「天台宗」の記述も同様であるが、教理の網格の中で、天台の『四教義』と、諦観の『四教義(諦観録)』との混同をしてはならないことを注意し、「五時八教」では最近、天台智顗の著作に、「五時八教」の用語はないことが承認されているが、この思想は天台にもあったと見てよいと断言する。その上で、単に「五時八教」という用語を用いるかどうかの問題ではなく、天台の教理がどのように受け継がれて変っていったかを反省しなけ

ればならないとし、このような要求を満たす天台宗の通史が見あたらない。また、「その割合に、思想の研究は進んでいないようである」とも述べて、何気ない叙述ながら、厳しい判断をくだしている。

「三蔵経」の中で、『毘勒論』にふれ、毘勒と推定されることを述べている。余談ではあるが、これは荻原雲来博士の所説で、『望月仏教辞典』の第二巻「毘勒」において詳しく述べられているのに、同じく第八巻の「増補」で「毘勒」をあえて立て、ほとんど同じ内容が説かれていたことに驚いているが、単なる見出しに有る無いの問題とも違い、相違があるなら、その補足のみを出すべきものと感じたことがあった。博士の相当部分の解説は当をえている。「天台宗」に関する部分は第三番目に長文の箇所である。しかし、よく知られている教理の解説でもある。むしろ、博士の「附 天台宗の研究手法」の解題が興味深い。

第七章「華嚴宗」は、天台宗の次に長文の部分である。しかも、天台と真言の間に、華嚴宗が位置づけられたところに、凝然の特色があることはすでに述べたが、平川博士は、華嚴においては、その性格上からか、註記

が殊のほか詳しい。「円教」の四行ほどの本文に対する註は十三頁に及んでいる。「十玄縁起」は、まさに辞典と変らない解説である。その註記によって解説文が要領よくまとめられている。この操作は難解な部分だけに、かなりの苦心を要したところであろう。著者の身になって考えないと理解できない配慮かも知れない。「附 華嚴宗の研究について」は博士が「華嚴宗の専門的な研究者ではないから、この解説も極めて皮相的な解説になるであろう」としながら、研究の進め方について十分な注意を与え、かつは華嚴研究の問題点を追及していることは、今後の研究の指針となるものである。

第八章「真言宗」は八宗の中では成実宗に次いで短い部分である。凝然が俱舎宗の半分の量で記していることから比べれば、博士の解説は幾らか長文となっている。真言宗では、付法の八祖と伝持の八祖とがあり、別伝してきたというのが一般的である。しかし、一部に合伝説があり、これについては不問に付しておられるが、それよりインドの歴史的事実と、密教經典の成立次第を紹介するという方法をとっている。日本への相承と発展を概観し、教理体系を要領よく概説し、その間にインド密教

との関連づけをして、従来の真言教理のみに墮すことを避けている。

第三編「附説」において、禪と浄土とが取り挙げられているが、もちろん略述しているわけで、ここでは凝然がどのように関心を持っていたかを知ることの方が興味深い。その点、平川博士の序説の解説は、凝然の時代（法然没後二十九年、親鸞・一遍の存命中）や著作など聞くものがある。凝然の禪宗と浄土宗に関する記述はあまりにも簡略である。したがって、凝然の別の著作によって、その関心度を知ることになる。それによると、弱冠の身で大いに知識を吸収した凝然の姿が知られるのである。

四

古典的でもっとも註記の詳しい『冠導八宗綱要』（四巻）は、その註が批判的であるよりは、記述の傍証に努め、そのための労を惜しまない点では、他の解説の真似のできるものではないが、それが逆に焦点のぼける註解となっている結果を含んでいることも事実である。それに対して、平川博士の新鮮な現代の研究を十分にとりいれて肉づけし、むしろ不要な解説は避け、足らざるを補

う方式は、両者の相違点を浮きあがらせることにもなると同時に、両者が数多くの解説本の両代表ということになる。

平川博士が凝然の経歴を記述するなかで、東大寺の戒壇で別受戒を受けたのは、凝然が十八歳の時で、戒壇院の円照の弟子となって律を学んだことが知られる。博士は、「さらに凝然は唐招提寺の証玄（一二二〇—一二九二）からも律を学び、南都律宗の中興となる。凝然はさらに東大寺真言院の聖守（一二一九—一二九一、聖守は円照の兄）から天台と密教を学び、同じく東大寺尊勝院の宗性（一二〇二—一二七八）から華嚴を学んだ。南都では、俱舎や唯識を学ぶ機会にも恵まれていたであろう」から、やがて『八宗綱要』（一二六八）を著す環境が整っていた上に、律と華嚴に秀でた理由の当然であることを確認する。それと同時に、華嚴と律を中心に実に数多くの著作を紹介し、俗に「百二十五部千二百余巻」を撰したといわれる代表作に触れておられるが、このことは、単に『八宗綱要』のみで、凝然の評価がなされるべきものでは当然なく、この背後には結局、凝然の著作を通して、凝然研究への緒口を示していることになっている。むしろ、博士

はそのことを念願して、本書を執筆していると言ってもよい。

本来、『八宗綱要』は各宗の歴史と教理が記されているのであるから、その一を問題にし、平川博士の解説と共に紹介すべき性質のものであろう。しかし、そのすべてを列挙することは紙数の関係で不可能である。したがって、恣意的に紹介せざるをえなかった。しかるに、平川博士の博覧強記ともいえる教理に対する深さと、凝然に対する敬愛の情こもる解説は、読者に付け入る隙を与えていない。『八宗綱要』は今後、本書を代表の解説書として利用しなければならぬほどに基本図書となることであろう。また、単なる解説書ではなく、『八宗綱要』を研究し、註記した、『新・八宗綱要』でもいべき書であるといえる。それほどに、註記は別としても、解説には暖かみと平川博士の長い間の蓄積が凝然大徳の著書にオーバラップしている新しい解説書を作りあげたと言つてよい。下巻の部分を校正刷りで拝見したので、「あとがき」にどう記されているかは知らないし、その後、どの程度に手が加えられたかも判明しないが、平川博士の各宗の最後にある文献解説は、その後の研究

の進展を知るのに不可欠なものであり、研究法についても研究に志す者にとってよい目安となるものである。最初の段階では「真言宗」の部分に研究書が皆無であったが、その後、参考文献をつけられたと聞く。どのように選ばれたかは知らないが、意欲的に補充されたのである。上巻においては誤植も少かったが、部分的に同一箇所に出てくる、随↓隋、目連↓目連などが目についた程度で、手際よい平川博士の学識のほどが偲ばれる。むしろ、そのようなことよりも、これから段々と漢文から遠ざかり、教理の理解に軟弱化していく若い学究に対する、平川博士の嘆きが聞えることの方が重大である。

（大蔵出版 上巻 一九八〇年十一月、下巻 一九八一年四月末発刊予定 各三、五〇〇円）

（いしがみ ぜんおう・大正大学教授）